

第43回中学生人権作文コンテスト

兵庫県大会

最優秀賞

## 杖の向こうに

新温泉町立夢が丘中学校 1年 田中 蒼真

ある日の夕食時、祖母の人工股関節の手術の経過について、その日の診察結果を祖父が話してくれた。順調に回復しているとのことで安心したが、まだ杖の生活が続くことに、祖母は顔を曇らせていた。しかし祖父が、誰もが自分らしく幸せに生きることが当たり前で、家族が支え合うことも当たり前だと話した。また、障害者には物理面や制度面の壁があり、中でも心の壁が一番生活に直結する壁だと教えてくれた。僕は、祖母の存在がありながら、障害者のことについて、自分とは直接関係ないと、深く知ろうとしなかったことが恥ずかしかった。

後日、祖母が僕に色々な思いを話してくれた。祖母は、まず、身体障害者手帳と、股関節手術後の両足に突き刺してある人工骨と止め金具のレントゲン写真を見せてくれた。強烈な写真に驚いていると、祖母は静かに話し出した。

約四十五年前、祖母の足は股関節が減り、右足が短くぎこちなく歩くようになった。僕の父を生んだ後、痛さも加わり常に杖を突くこととなった。そんな中、会社勤めでも杖を欠かせない生活が始まった。なぜか引け目を感じていたが、会社の多くの人が気遣いし助けてくれた。しかし、神戸の病院へ通院した時、駅中を歩いていると、祖母を見て同年代の女性二人が少し離れた場所で指をさし小声でボソボソ話していた。「かわいそう」の音が聞こえ祖母の心が震えた。同時に、何とも言えぬ恥ずかしさと悲しみが込み上げて来たようだ。なぜ同世代の人が私を…。杖の向こうに人の心が少し見えたような気がしたと言った。その後、杖をついて外出すると、なぜか自分がビクつき心が細くなっていることがすごく悔しかったようだ。

僕は、ここまで聞いて、なぜか胸が苦しくなる自分を感じた。

でも、祖母はうれしい話もしてくれた。子供の小学校運動会の親子演技では、何もできず他の人に依頼し見ているだけだったが、秋の山登り遠足の時、担任の先生が車で別道を登り頂上まで送ってくれた。そこで親子一緒に弁当を食べたことは、忘れられないと言った。行事計画の中で、学校の先生方の人に寄り添う心が見えたようだ。

また、通院の途中満員電車で立っていると、茶髪で派手な服を着たお兄さんが、

誰より先に「どうぞ」と手を差し延べ席をゆずってくれたそうだ。さり気なく当然のように振る舞う姿に感謝し感動したそうだ。一方でその時、祖母の心にあった人を外見で判断していた自分の若者への偏見を恥じたそうだ。

さらに、病院の待合で励まされたこともあったようだ。それは、若い女性が震災で両足が義足になった身体で、しかも半ズボン姿で自力歩行の訓練をしていた。彼女は杖の祖母を見つけ笑顔で話しかけ、共にがんばろうと声をかけてくれた。その時、祖母は、私には自分の足がある、何で負けていられるか、自分で出来ることは絶対やるんだと強く勇気づけられたと言った。

多くの体験を具体的な事として話してくれたが、祖母の話す姿から、本当は胸の中にもっとたくさん偏見による悲しい経験があることを感じ取った。きつと口に出せないのだろう。

最後に祖母は、相手の気持ちになって寄り添い、自分もやってうれしい行為を続けることが、互いを笑顔にするととても大切なことだと僕への話を結んでくれた。

僕は、この話から次のことを学んだ。障害者にとって辛いことは、自分の努力ではどうしようもない身体的なことや外見を指摘されること。また、親切心だと考え本人の意思とは関係なく先にやってしまうことである。逆に支援が励ましになることとして、さり気なく、恩着せがましくなく立場を理解し行動に移してくれることなどだ。障害に関係なくだれも自分で出来ることは自分でやりたいのだ。

僕は物質や文化に恵まれた今の時代、だれも様々な環境の中でより良く生きたいと願っていることは知っている。また、解かっているつもりである。しかし、時々自分の感情や思いを中心に他を見てしまう自分の姿に驚く。他の人も僕と同じようにぶつかりながら強く生きたいと思っているはずである。

自分も相手も同じ一人の人間だと思い、人の心に寄り添い理解し合う努力こそ、今の僕達に必要な課題である。これこそが、人権を守り人の願いを互いに支え合う大きな力なんだろうと思う。

祖母の『さあ、今日のお昼は皆と何を食べようか』と、杖をついて買い物に出かける姿に、僕は負けてはいられない。日々の生活での人権意識と行動は、僕が努力していく大きな夢への課題であり力であると強く感じた。